

処方秘箋

泉鏡花

青空文庫

此この不思議なことのあつたのは五月中旬なかば、私が八歳やつつの時、紙かみや
 谷町まちに住んだ向うの平家ひらやの、お辻つじといふ、十八の娘、やもめの
 母親と二人ぐらし。少しある公債を便りに、人仕事ひとしごとなどをした
 のであるが、つゞまやかにして、物綺麗ものきれいに住んで、お辻も身だ
 しなみよ好く、髪かみ形かたちを崩さず、容色きりようは町々の評判、以前五百
 石こくどり取の武家ぶけ、然しかるべき品ひんもあつた、其家そのいえへ泊りに行つた晩の
 出来事うちで。家も向ひ合せのことなり、鬼ごツこにも、碓きしやごはじきに
 も、其家そこの門かど口ぐち、出窓の前は、何時いつでも小児こどもの寄合よりあふ処ところ。次郎

だの、源だの、六だの、腕白どもの多い中に、坊ちやんくくと別ものにして可愛がるから、姉はなし、此方からも懐いて、ちよこくと入つては、縫物を交返す、物差で刀の真似、馴ツこになつて親んで居たけれども、泊るのは其夜が最初。

西の方に山の見ゆる町の、上の方へ遊びに行つて居たが、約束を忘れなかつたから晩方に引返した。之から夕餉を済してといふつもり。

小走りに駆けて来ると、道のほど一町足らず、屋ならび三十ばかり、其の山手の方に一軒の古家がある、丁ど其処で、兎のやうに刎ねたはずみに、礫に躓いて碯と倒れたのである。

俗にいふ越後は八百八後家、お辻が許も女ぐらし、又海手の

二階屋も男おとこ気なし、棗なつめの樹のある内も、男おとこが出入ではいりをするばかりで、年増としまは蚊帳かやが好すきだといふ、紙谷町一町あいだの間に、四軒、いづれも夫なしで、就なかんずく中今な転んだのは、勝手の知れない怪しげな婦人の薬屋であつた。

何処いずこも同一おなじ、雪国の薄暗い屋造やづくりであるのに、廂ひさしを長く出した奥深く、煤すすけた柱に一枚懸けたのが、薬の看板で、雨にも風にも曝さらされた上、古び切つて、虫ばんで、何といふ銘めいだか誰たれも知つたものはない。藍あゐを入れた字のあとは、断々きれぎれになつて、恰あたかも青い蛇へびが、渦うずまま立つ雲がくれに、昇天なりをする如く也。

別に、風邪薬かぜぐすりを一貼ちよう、凍傷しもやけの膏薬こうやく一具ひとかい買かひに行つた話
 は聞かぬが、春あけぼのの曙、秋の暮、夕顔ゆげの咲けるほど、炉ろの櫓ほだの消きゆ

る時、夜中にフト目の覚むる折など、町中を籠めて芬々と香ふ、湿っぽい風は薬屋の氣勢なので。恐らく我国の薬種で無からう、天竺伝来か、蘭方か、近くは朝鮮、琉球あたりの妙薬に相違ない。然う謂へば彼の房々とある髪は、なんと、物語にこそ謂へ目、前、解いたら裾に靡くであらう。常に其を、束ね髪にしてカツシと銀の簪一本、濃く且つ艶かに堆い鬢の中から、差覗く鼻の高さ、頬の肉しまつて色は雪のやうなのが、眉を払つて、年紀の頃も定かならず、十年も昔から今にかはらぬといふのである。

内の様子も分らないから、何となく薄気味が悪いので、小児の気にも、暮方には前を通るさへ駆け出すばかりにする。真昼

間、向う側から密と透して見ると、窓も襖も閉切つて、空屋に
 等しい暗い中に、破風の間から、板目の節から、差入る日の光一
 筋二筋、裾広がりにはつと明く、得も知れぬ塵埃のむ
 らくと立つ間を、兎もすればひらくと姿の見える、婦人の影。
 転んで手をつくとき、はや薬の匂がして膚を襲つた。此の一
 町がかりは、軒も柱も土も石も、残らず一種の香に染んで居る。
 身に痛みも覚えぬのに、場所もこそあれ、此処はと思ふと、怪
 しいものに捕へられた気がして、わつと泣き出した。

「あれ危い。」と、あぶな忽ち手たちまを伸のべて肩をつかまへたのは彼の婦人おんなで。

其の黒髪の中の大理石のやうな顔を見ると、小さな者はハヤ震へ上つて、ふりもぎ振撈らうとして身をあせつて、こすずめ仔雀の羽はうつ風情ふぜい。怪しいものでも声は優しく、

「おゝ、ひざ膝が擦剥すりむけました、薬をつけて上げませう。」と左手ゆんでには何どうして用意よういをしたらう、既かに薰おりの高いのを持つて居た。

やもり守宮の血で二にの腕うでに極ごく印いんをつけられるまでも、膝ひざに此の薬を塗ぬられて何どうしよう。

「厭いやだ、厭いやだ。」と、しやにむに身み悶もだえして、声こゝろ高たかになると、
「強情じやうじやうだねえ、」といつたが、漸やっと手を放し、其のまゝか駆出けださう

とする耳の底へ、

「今夜、お辻さんの処へ泊りに行くね。」

といふ一聯の言を刻んだのを、……今に到つて忘れない。

内へ帰ると早速、夕餉を済し、一寸着換へ、糸、犬、錨、な

どを書いた、読本を一冊、草紙のやうに引提げて、母様に、

帯の結目を丁と叩かれると、直に戸外へ。

海から颯と吹く風に、本のペエジを乱しながら、例のちよこ

ゝ、をばさん、辻ちゃんと呼びざまに、からりと開けて飛込んだ。

人仕事に忙しい家の、晩飯の支度は遅く、丁ど御膳。取附

の障子を開けると、洋燈の灯も朦朧とするばかり、食物の湯

気が立つ。

冬でも夏でも、暑い汁つゆの好すきだつたお辻の母親は、むんむと気の昇る腕わんを持つたまゝ、ほてつた顔をして、

「おや、おいで。」

「大層おもたせぶりね、」とお辻は箸箱はしぼこをがちやりと云はせる。母親もやがて茶碗の中で、さら〜と洗つて塗箸ぬりばしを差置さしおいた。手で片頬かたほをおさへて、打傾うちかたむいて小楊枝こようじをつかひながら、皿さ小鉢らこぼちを寄せるお辻を見て、

「あしたにすると可いいやね、勝手へ行つてたら坊ぼうちやんが淋さびしからう、私は直すぐに出懸でかけるから。」

「然そうねえ。」

「可いいよ、可いいよ、構かまやしないや、独ひとりで遊あそんでら。」と無雜むぞう作さに、

小さな足で 大胡坐おおあぐらになる。

「ぢや、まあ、お出懸けなさいまし。」

「大人おとなしいね。感心、」と頭を撫なでる手つきをして、

「どれ、其それでは、」楊枝を棄すてると、やつとこさ、と立ち上つた。

お辻が膳ぜんを下げる内に、母親は次の仏間ぶつまで着換きかへる様子、其処そこ

に箆筒たんすやら、鏡台たんすやら。

最も一ツ六畳もひとが別に戸外おもてに向いて居て、明取あかりとりが皆みんなで三間げんなり。

母親はやがて、縷子しゆすの帯を、前結びにして、風呂敷包ふろしきづつみを持つ

て躰あらわれた。お辻の大柄な背のすらりとしたのは違ひ、丈たけも至つ

て低く、顔かおかたち容こづくりも小造な人で、髪も小さく結ゆつて居た。

「それでは、お辻や。」

「あい、」と、がちやくいはせて居た、彼方かなたの勝手に返事をし、
 櫛たすきがけのまゝ、駆けて来て、

「気をつけて行らつしやいませよ。」

「坊ちゃん、緩ゆっくり遊んでやつて下さい。直ぐ寝つちまつちやあ不ぼっ可けませんよ、何どうも御苦労様なことツたら、」

とあとは独ひとりごと言かまち、框かまちに腰をかけて、足を突出つきだすやうにして下げ駄たを穿はき、上おっへ蔽おっかぶさつて、沓くつぬぎごし脱越ごしに此方こちらから戸をあけるお
 辻の脇あけの下あたりから、つむりを出して、ひよこくくと出て
 行つた。渠かれは些ちと遠方をかけて、遠縁つやのもののの通夜まいに詣まつたので
 ある。其がために女むすめが一人だからと、私とを泊とめたのであつた。

枕に就いたのは、良ほど過ぎで、私の家の職人衆が平時の湯から帰る時分。三人づれで、声高にもものを言つて、笑ひながら入つた、何うした、などと云ふのが手に取るやうに聞えたが、又笑聲がして、其から寂然。

戸外の方は騒がしい、仏間の方を、とお辻はいつたけれども其方を枕にすると、枕頭の障子一重を隔てて、中庭といふではないが一坪ばかりのしつくひ叩の泉水があつて、空は同一ほど長方形に屋根を抜いてあるので、雨も雪も降込むし、水が溜つて濡れて居るのに、以前女髪結が住んで居て、取散かした元

つとい
結が化つたといふ、足巻と名づける針金に似た黒い蚯蚓が多
いから、心持が悪くつて、故と外を枕にして、並んで寝たが、
最も夏の初めなり、私には清らかに小搔巻。

寝る時、着換へて、と謂つて、女の浴衣と、紅い扱帯をくれた
けれども、角兵衛獅子の母衣ではなし、母様のいひつけ通り、
帯を《し》めたまゝで横になつた。

お辻は寒さをする女で、夜具を深く被けたのである。

唯顔を見合せたが、お辻は思出したやうに、莞爾して、
「さつき、駆出して来て、薬屋の前でころんだのね、大な形をし

て、をかしかつたよ。」

「呀、復見て居たの、」と私は思はず。……

これ
 之は此の春頃から、其まで人の出入さへ余りなかつた上の薬
 屋が方へ、一人の美少年が来て一所に居る、女主人の甥ださ
 うで、信濃のもの、継母に苛められて家出をして、越後なる叔
 母を便つたのだと謂ふ。

此のほどから黄昏に、お辻が屋根へ出て、廂から山手の方を
 覗くことが、大抵日毎、其は二階の窓から私も見た。

一体裏に空地はなし、干物は屋根でする、板葺の平屋造
 で、お辻の家は、其真中、泉水のある処から、二間梯子を懸け
 てあるので、悪戯をするなら小児でも上りは自由な位、干
 物に不思議はないが、待て、お辻の屋根へ出るのは、手拭一
 筋棹に懸つて居る時には限らない、恰も山の裾へかけて紙谷町

は、だら／＼のぼり、斜めに高いから一目に見える、薬屋の美少年をお辻が透見すきみをするのだと、内の職人どもが言ことばを、小耳こみみにして居るさへあるに、先刻さつき転んだことを、目のあたり知まつて居るも道理こそ。

呀や、復見またて居たの……といったは其の所為せいで、私は何の気もなかつたのであるが、之これを聞くと、目をぱつちりあけたが顔あかを赧めめ、

「厭いやな！」といつて、口許くちもとまで天鷲絨びろうどの襟えりを引ひかぶつた。

「そして転んだのを知つてるの、をかしいな、辻つちゃんちは転んだのを知つてるし、彼あのをばさんは、私の泊るのを知つて居たよ、皆みんな知つて居ら、をかしいな。」

四

「え！」と慌あわただしく顔を出して、まともに向直むきなつて、じつと見て、

「今夜泊とどることを知つて居ました？」

「あゝ、整ちやんと然そう言つたんだもの。」

お辻は美しい眉まゆを顰ひそめた。燈火ともしびの影暗く、其の顔寂さみしう、

「恐おそろしい人だこと、」といひかけて、再び面おもてを背そむけると、又深ふか々ぶと夜具やぐをかけた。

「辻ちゃん。」

「……………」

「辻ちゃんてば、」

「……………」

「よう。」

こんな約束ではなかつたのである、俊徳丸しゅんとくまるの物語のつゞき、それから手拭てぬぐいを藪やぶへ引いて行つた、踊おどりをする三さんといふ猫の話、それもこれも寝てからといふのであつたに、詰つまらない、寂さびしい、心細い、私は帰らうと思つた。丁ちようど其その時とき、どんと戸を引いて、かたりと鎖じようをさした我家わがやの響ひびき。

胸とどろが轟とどろいて搔かき卷まきの中なかで足をばたくしたたが、堪たまらなくツて、くるりとはらばひになつた。目を開あいて耳みみを澄すますと、物音ものねは聞きえないで、却かえつて戸外おもてなる町まちが歴あり然ありと胸むねに描えかれた、暗やみである。駆

けて出て我家の門へ飛着いて、と思ふに、夜も恁う更けて、他人の家からは勝手が分らず、考ふれば、毎夜寐つきに聞く職人が湯から帰る蹻音も、向うと此方、音にも裏表があるか、様子も違つて居た。世界が變つたほど情なくなつて、枕頭まくらもとに下した戸外おもてから隔ての蔀しとみが、厚さ十万里を以て我を囲ふが如く、身動きも出来ないやうに覺えたから、これで殺されるのか知らと涙ぐんだのである。

ものの懸念おつかさんさに、母様おつかさんをはじめ、重吉じゆうきちも、嘉蔵かぞうも呼立てる声も揚げられず、呼吸いきさへ高くしてはならない氣がした。

密そつと見れば、お辻はすやくと糸が揺れるやうに幽かすかな寐息ねいき。

これも何者かに命ぜられて然しかく寐入ねつて居るらしい、起して

く時、折に触れた今までに、つい其夜の如く香の高かつた事はないのである。

瓶か、壺か、其の薬が宛然枕許にでもあるやうなので、あまり余の事に再び目をあけると、暗の中に二枚の障子。件の泉水を隔てて寢床の裾に立つて居るのが、一間真蒼になつて、棧も数へらるゝばかり、黒みを帯びた、動かぬ、どんよりした光がさして居た。

見るゝ裡に、べらゝと紙が剥げ、棧が吹ツ消されたやうに、ありのまゝで、障子が失せると、羽目の破目にまで其の光が染み込んだ、一坪の泉水を後に、立顕れた婦人の姿。

解き余る鬢の堆い中に、端然として真向の、瞬きもしない鋭い

顔は、正しく薬屋の主婦である。

唯見る時、頬を蔽へる髪ほお おおのさきとに、ゆらくと波立なみだつたが、そ
 よりともせぬ、裸はだ蠟燭かるうそくの蒼い光あおを放つのを、左手ゆんでに取つてす
 るくと。

五

其の裳もすその触ふるゝばかり、すつくと枕許つったに突立つたつた、私は貝を磨
 いたやうな、足の指を寝ながら見て呼吸いきを殺した、顔も冷つめとうなる
 ままでに、室まの内を隈くまなく濁なまめつた水晶に化し了するのは蠟燭の鬼火
 である。鋭い、しかし媚なまめいた声して、

「腕白、先刻はよく人の深切を無にしたね。」

私は石になるだらうと思つて、
一思に窘んだのである。

「したが私の深切を受ければ、此の女に不深切になる処。感心に

お前、母様に結んで頂いた帯を《し》めたまゝ寝てること、

腕白もの、おい腕白もの、目をぱちくりして寝て居るよ。」とい

つて、ふふんと鷹揚に笑つた。姐御真実だ、最う堪らぬ。

途端に人膚の氣勢がしたので、咽喉を嚙れたらうと思つたが、

然うではなく、蠟燭が、敷蒲団の端と端、お辻と並んで合せ目

の、畳の上に置いてあつた。而して婦人は膝をついて、のしかゝ

るやうにして、鬢の間から真白な鼻で、お辻の寐顔の半夜具を引

かついで膨らんだ前髪の、眉のかゝり目のふちの稍曇つて見える

のを、じつと覗のぞきこ込んで居るのである。おゝ、あはれ、小やかにささ慎ましいつつ寝姿は、藻脱もぬけの殻か、山に夢がさまよふなら、衝つきもと戻す鐘も聞えよ、と念あやじ危ぶむ程こそありけれ。

おんなおんなめてめてさしのばさしのば婦人は右手を差伸して、結立ゆいたての一筋ひとすじも乱れない、お辻の高島田むずを無手つかと掴んで、づつと立つた。手荒さはげ、烈しはげさ。元結もとゆいは切れたから、髪つるのずるりと解とけたのが、手の甲ここうに絡まつはると、宙に釣つるされるやうになつて、お辻は半身はんしん、胸もあらはに、引ひきおこ起されたが、両手を畳に裏返して、呼吸いきのあるものとは見えない。

爾そのとき時めて、右手に黒髪からを捌からんだなり、

「人もあらうに私の男けそとに懸想けそとした。さあ、何どうするか、よく御覽

。」

左手ゆんでの肱ひじを鍵かぎ形なりに曲まげて、衝つと目めよりも高たかく差さ上げた、掌たなに、
 細こ長い、青あおい、小こさな瓶びんあり、捧たげて、俯うつ向むいて、額ひたいに押お当て、
 「呪のろ詛いの杉すぎより流ながれし雫しずくよ、いざ汝なんじちかいの誓ちかいを忘われず、目まのあたり、
 験しるしを見みせよ、然さらば、」と言いつて、取とり直なおして、お辻つじの髪かみの根ねに
 口くちを望のぞませ、

「ああの美う少年せうと、容きり色ようも一い対つと心こころ上あつた淫いた奔ざ女らもの、いいで
 く女たの玉たまの緒おは、黒くろ髪かみととももに切きれよかし。」
 と恰あたかも宣のたま告かをするが如ごとくに言いつて、傾かたけると、颯さつとかかつて、
 千ち筋すじの紅べに溢あふれて、糸いとを引ひいて、ねばねくと染にむと思おもふと、丈たけなる
 髪かみはほつりと切きれて、お辻つじは崩くづれるやうに、寢ね床とこの上うへ、枕まくらをはづ
 して土つち気け色いろの頬ほを蒲ふと団んに埋うづめた。

玉の緒か、然らば玉の緒は、長く婦人の手に奪はれて、活きたる如く提げられたのである。

莞爾として朱の唇の、裂けるかと片頬笑み、

「腕白、膝へ葉をことづかつてくれれば、私が来るまでもなく、

此の女は殺せたものを、夜が明けるまで黙つて寐なよ。」といひ

すてにして、細腰楚々たる後姿、肩を揺つて、束ね髷がざ

わくくと動いたと見ると、障子の外。

蒼い光は浅葱幕を払つたやうに颯と消えて、襖も壁も旧の通

り、燈が薄暗く点いて居た。

同時に、戸外を山手の方へ、からこんくと引摺つて行く婦人

の蹠音、私はお辻の亡骸を見まいとして掻巻を被つたが、

案外かな。

抱起だきおこされるまばゆと眩いばかりの昼であつた。母親も歸つて居た。

抱起したのは昨夜ゆうべのお辻で、高島田も其まゝ、早はや朝の化粧けわいもしたか、水の垂たる美しさ。呆あっけ気けに取られて目も放さないで目詰みつめた居ると、雪にも紛まがふ頸うなじを差つけ、くつきりした鬚まげの根を見せると、白粉おしろいの薫かおり、櫛くしの齒すきも透すき通とおつて、

「島田がお好すきかい、」と唯ただあでやかなものであつた。私は家に歸つて後のちも、疑うたがいは今とに解とけぬ。

お辻は十九で、敢あえて不思議はなく、煩わずらつて若死わかじにをした、其の黒髪を切つたのを、私は見て悚然ぞつとしたけれども、其は仏教を信ずる国の習慣であるさうな。

青空文庫情報

底本：「日本幻想文学集成1 泉鏡花」国書刊行会

1991（平成3）年3月25日初版第1刷発行

1995（平成7）年10月9日初版第5刷発行

底本の親本：「泉鏡花全集」岩波書店

1940（昭和15）年発行

初出：「天地人」

1901（明治34）年1月

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2009年5月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

処方秘箋

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>